

「教えられやすい心」 (要旨)

聖書箇所：マタイ 5:5

【1】 柔和な者というけれど…

山上の説教の幸いシリーズが3回目を迎えます。今朝は「柔和な者は幸いです」(5)について学びましょう。「柔和」は、穏やかさや落ち着いている様子をさす言葉です。この特性は一般的に良いものと認識されています。傲慢に威張り散らすよりは柔和でありたい、そう多く人は考えるでしょう。しかし私たちの本音はどうでしょうか。柔和であることに越したことはないが、現実はそう甘くない。周りの人々が常に味方で、善意の人々であれば、安心して「柔和な者」になれるだろう。しかし「柔和」であることで、不利益を被るようなら話は別。悪意や敵意がある人を前にして穏やかに落ち着いて対応することなど出来ない。果たして、私たちが「柔和な者」でいられるかどうかは自分を取り巻く環境次第なのでしょうか。「柔和な者」とは、一部の人徳のある人や、愛情を受けて育った人を指し、その人たちは幸いであると、そのように理解して良いのでしょうか。

【2】 主イエスが語る柔和な者

主イエスの教える「柔和な者」(5)について考えてみましょう。この主イエスの教えは旧約聖書の詩篇 37 篇 11 節の引用です。「しかし 柔和な人は地を受け継ぎ 豊かな繁栄を自らの喜びとする。」(詩篇 37:11)

同上で「柔和」と訳されたヘブル語の「アナーウ」の意味は、「ひざまづく」、「腰を曲げる」など、抑圧された奴隷状態にあることを示しました。そこから転じて自分を神の貧しいしもべとみなし、神の意志に完全に服従し、人に対して怒りや傲慢な思いを抱かない状態を指して用いられるようになりました。別の箇所では「貧しい者」(イザヤ 61:1)と訳されます。

したがって柔和な者とは、自分の貧しさを知るゆえに、威張ることをせず、教えられやすい心を持った人のことです。その典型的な人物が

モーセでした。「モーセという人は、地の上のだれにもまさって柔和であった。」(民数記 12:3)

彼は若き日に、指導者になろうとしましたが挫折をし、老年になって、神が彼を指導者として選ばれた時には柔和な者とされていました。

「柔和な者」も「心の貧しい者」と同様に神の救いを待ち望まざるを得ない人々なのです。主イエスは、心打ち砕かれ、悲しみ、そしてひざまづく「柔和な者」を幸いと言われたのです。

【3】 地を受け継ぐ

イエスが「幸いです」と言われた理由は「その人たちは地を受け継ぐから」でした。旧約聖書では「地を受け継ぐ」とは神様の救いを意味しました。イスラエルの民に与えられた「乳と蜜の流れる地」(申命記 11:8)に入るとは、エジプトからの脱出、紅海での出来事、荒野の訓練を経た、一連の出来事のゴールであるだけでなく、救いの完成を意味していたのです。したがって「地を受け継ぐ」とは神の救いに見えるしるしとして語られていました。新約聖書の主イエスの語る「地」はそうしたパレスチナの「地」のみを指しているものではありません。この「受け継ぐ」という動詞の目的語は、5章5節を除いて「永遠のいのち」とか「神の国」です。柔和な者は神の救いである「永遠のいのち」を「受け継ぐ」と理解できます。自分自身では獲得することのできない素晴らしい特権を「受け継ぐ」ことのできる幸いな者とは、神の救いを待ち望む「柔和な者」だと言うのです。

▷自分の無知、弱さ、そして欠乏を知る者は傲慢でいられなくなり、無知だと認める者は教えを乞います。そうした「教えられやすい心」を持っている者たちが、神ともにあるいのちを受け継ぐ幸いな者だと言うのです。

